

# 自ら課題を設定し、知を築く生徒の育成(最終年次)

～言葉を介して他者と関わり、自ら学びを進め振り返る方略の研究～

嶋田 善行, 永井 悦美

Yoshiyuki SHIMADA, Etsuyoshi NAGAI

## 概要

1年次研究では、副題を「自己調整的な知の構築へとつなげる方略の研究」とし、自己をメタ認知しモニタリングしながら学びを進めることのできる生徒の育成を目指して、プロジェクト型の学習活動を設定した。2年次研究では、このプロジェクト型の学習活動をさらに一歩進め、各フェーズにおける「問い」を洗練させた。その結果、問いに向き合う中で生徒が自らの学びを把握しながら逐次学習を進め、適切に振り返ることができた。最終年次研究においては、各単元(プロジェクト)の学習が進む中で、ICTの活用や生徒の非認知能力を高める工夫を施すことで、それに伴って主体的に学習に取り組む態度を高め、それを生徒がリフレクションすることでより質の高い学びを創出できると考えている。

キーワード：プロジェクト型の学習、非認知能力、アセスメント、主体的に学びに取り組む態度

## 1. はじめに～研究の目的

学習指導要領(2017年7月)の総則編には、学習活動の質を更に改善・充実させていくための視点が示されており、全ての教科等において共通に「単元(題材)など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること」とした上で、とりわけ国語科においては、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言葉の特徴や使い方などを理解し自分の思いや考えを深める学習の充実を図ること」\*1としている。

さらに、石井英真(2017)は、「子どもがまず自分でテキストを読み、ある解釈をもつ。そして、集団での練り上げで、ほかの子どもたちの解釈を聞く。(中略)ただ他者から学んだ見方をなぞるだけでなく、多かれ少なかれ、その子なりの新しい発見や解釈が生まれうるのである。」\*2としている。

これらを合わせて考えると、言葉を用いて自らの思いや考えを深めるための大きな条件として、その言葉が、他者とつながるためのものであり、かつ自らの学びを詳細に捉えるものでなくてはならないとすることができる。

## 2. 生徒の実態(2年次研究の成果と課題)

本校国語科の2年次研究では、プロジェクト型の学習プロセス\*3において、特に各フェーズでの「問い」を精選することを心がけた。その結果、単位時間どうしのつながりがより一層スムーズになり、同時に生徒の学びにもつながりがもたらされ、「知識・技能」や「思考・判断・表

現」の確実な高まりを促すことができた。

また、各フェーズに対話場面を設けることで、他者との差異の中で自らの表現等を見つめ直し、改善(再構築)へとつなげることができた。このことは、他者との対話が、新たな智慧や価値を生んだということに他ならない。

おそらく社会においても、あるプロジェクトを遂行し成功させるためには、他者との協働が欠かせないファクターとなる。だとすれば、プロジェクト型の学習プロセスによる単元の設計は、ひいては生徒の社会生活にまで転用できるものであるといえそうである。

しかしながら、以下のような課題もある。

- ①「主体的に学習に取り組む態度」に確実にアプローチし、育成や見取りにつなげることができていない。
- ②ICT機器を、考えたことや作成したものを教室の内外で表現・共有する場面において、うまく活用できていない。

とりわけ①については、「主体的に学習に取り組む態度」の本質をより明らかにし、整理して、見取りやそこに向かう指導、さらにはフィードバックにつなげていかなくてはならないと考える。

### 2. 1. 目指す生徒像

本校国語科では、以上の課題や求めを踏まえ、最終年次研究の目指す生徒像を以下のように捉え直した。

- ・自己の学びを客観的に捉えることのできる生徒
- ・ICT機器の利活用を通して、他者と表現・共有し自らの学びを深めることのできる生徒

### 3. 研究主題及び副題

自らの抱えるプロジェクトを進行させるためには、目的を一にする他者との（言語を用いた）関わりの中で、自らの行動を逐次モニタリングすることが必要である。さらに、しかる後に自らの行動を振り返り、次へとつなげる力もまた重要である。

以上のことから、本校国語科の最終年次研究の主題と副題を以下のように設定した。

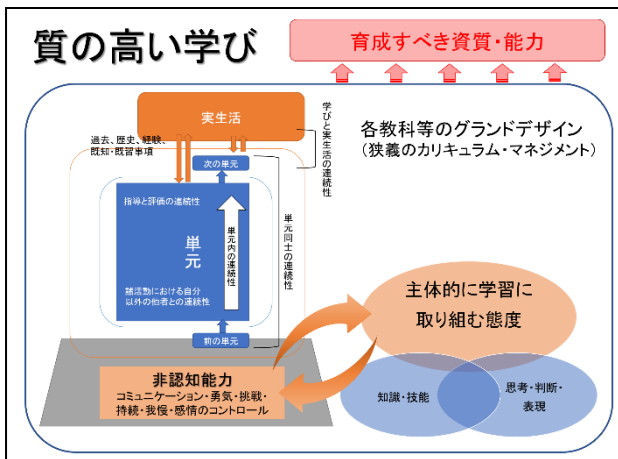
自ら課題を設定し、知を築く生徒の育成(最終年次)  
～言葉を通じて他者と関わり、自ら学びを進め振り返る方略の研究～

### 4. 研究の内容と方法

本校の最終年次研究においては、生徒の実態やこれからの時代の潮流を踏まえ、引き続き「質の高い学び」に向かうために、単元や題材における「連続性」、さらには高めたい「資質・能力」を踏まえた単元や題材の全体構想(以下、グランドデザイン)というものを設計することが重要であると捉えている<sup>4)</sup>。

なお、本校研究の概要にもある通り、このグランドデザインにおいて特に重要視しているのは「主体的に学習に取り組む態度(≒非認知能力)」へのアプローチである。主体的に学習に取り組む態度は、学びに向かう基軸となるものであり、その高まりがさらに質の高い学びを生み、ひいては各教科等における資質・能力の育成につながるものと考えられるためである。

これらのことを踏まえた本校の最終年次研究の構造図は以下である。



本校最終年次研究の構造図

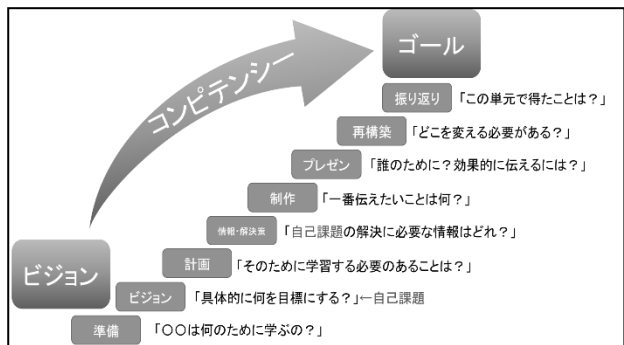
この中で、本校国語科では、特に「単元の連続性」や「非認知能力の育成及び評価(以下、アセスメント)」に焦点を当てて実践研究を進めることとした。これらが、「2. 1.」で示した目指す生徒の育成に向かう上で下支えとなる視点であると考えたためである。

### 4. 1. プロジェクト学習における ICT 機器の活用

前述のグランドデザインを描くにあたり、指導の手立ての一つとして、単元をつくる際にプロジェクト学習の手法(例えば、鈴木敏恵(2012))を土台とすることが有効であると考えられる。「プロジェクト」とは、ビジョンや必要感に基づいて設定した、ある目的(ゴール)を果たすための構想や計画のことであり、プロジェクトの特徴やセオリーを学習に生かしたものが本稿で述べるプロジェクト学習である<sup>5)</sup>。

また、プロジェクトは一人で完結するものでなく、同じ志を持った人間が、チームで協働して目標に向かうものである。この「チーム」とは、現代の学校教育の文脈でいえば、主として同じ教室にいる仲間であるのと同時に、場合によっては ICT 機器及びネットワークによって結ばれた仲間であると想定できる。

さらに、このプロジェクト学習における各フェーズには、それぞれ適切な「問い」が必要である<sup>6)</sup>。この「問い」については、本校国語科の2年次研究において以下のように設定している。



プロジェクト学習を土台とした単元の流れと「問い」

これらの問いを各単元の特性に合わせて作り、それを適切なタイミングで生徒に投げ、考えさせることで、それぞれのフェーズにおいて必要な力を確実に身に付けていきたいと考えている。具体的には、各フェーズにおいて、以下の力を身に付けることができると考えている。

準備	課題を発見する力
ビジョン	目標を設定する力
計画	戦略的に計画する力
情報・解決策	必要な情報を見極める力・発想力
制作	追究し、わかりやすく表現する力
プレゼン	コミュニケーション力
再構築	論理的に表現する力
振り返り	ゴールから振り返る力、次を見通す力

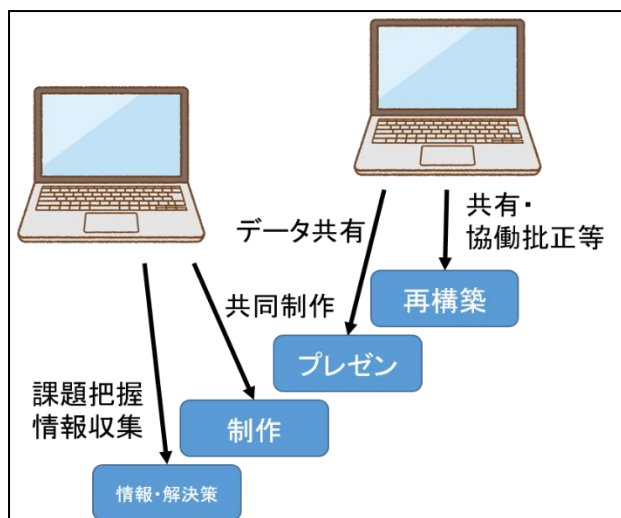
このように、プロジェクト学習の手法を基本として、そこに適切な「問い」を用い、内省的に自問自答を繰り返す

ながら学びを進行させることで、おのずと単元内の学びが連続性を帯びていくものと考えます。

とはいえ、これらの学びが個人の内部に孤立したものにならないようにする必要もある。学びをより開かれたものとするための鍵が、各フェーズにおけるICTの活用である。

本研究では、ICT 機器を効果的に利活用することで、他者と表現・共有しながら、個々の生徒の学びがますます深まることをねらいとしている。

前述のプロジェクト学習の各フェーズに ICT を取り入れると、以下のような構造になる。



各フェーズへの ICT 機器の導入(例)

このように、「情報・解決策」のフェーズにおいては、個人や他者との協働による課題把握や情報収集、「制作」ではクラウド等を用いた協働による制作、「プレゼン」ではデータの共有・表現、「再構築」ではクラウド上のデータを協働で批正する等の活動が考えられる。

こうして ICT を活用することで、各フェーズにおける学習の幅が広がると同時に、他者と共に表現し、情報を共有して学びを深めることができると考えている。

#### 4. 2. 省察を促す非認知能力「自己評価シート」(アセスメントシート)の活用

「質の高い学び」を担保するためには、主体的に学習に取り組む態度に確実にアプローチし、生徒の非認知能力を高めることが肝要である<sup>\*7</sup>。とりわけ本校国語科の最終年次研究では、前述の通り「言葉を介して」円滑に他者と関わる生徒の育成を目指している。ここでいう言葉を介した関わりとは、言語的(バーバル)なもののみならず、非言語的(ノンバーバル)なものも多分に含まれている。それらは、非認知能力の多くの側面と深く関わっているものと考えられる。

本研究においては、各単元の途中や最後に、「非認

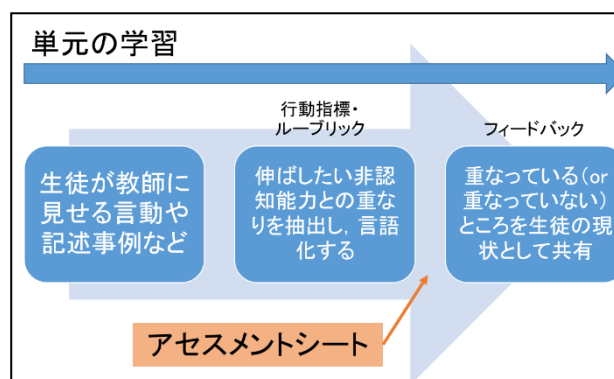
知能力『自己評価シート』(以下、アセスメントシート)を用い、その都度省察を促すことで、生徒自身が自らの非認知能力の高まりを逐次点検し、学習を進めたり評価したりすることができると想定している。

本研究で用いるアセスメントシートの基本形は以下に示しているが、大きくは「自分と向き合う力」「自分を高める力」「他者とつながる力」の3つに分類される。これらは中山芳一(2020)に拠っている<sup>\*8</sup>。

自分と向き合う力	1	辛いことや苦しいことがあっても平常心で学習に臨めた
	2	落ち込むことがあっても気持ちを切り替えて学習に臨めた
	3	イライラしてもそれを抑えて耐えながら学習に臨めた
	4	一度始めたことは、最後まであきらめずに持続できた
自分を高める力	5	一度はじめたことをもっと続けてみたいと思えた
	6	自分の努力を知識・技能の向上や課題解決につなげられた
	7	具体的に目標設定して、その目標に着実に向かえた
	8	いまの取組をさらに改善しようと思えた
他者とつながる力	9	相手の性格や考えを理解しながら関わって学習できた
	10	周囲の雰囲気を感じ取りながら学習できた
	11	今の相手の思いを理解しようと思えた
	12	集団における自分の役割を自覚して学習できた

本研究で用いるアセスメントシート

このようなシートをベースとしながら、単元や教材の特性、及び言語活動等に合わせてその都度文言を変更しながら用いていきたいと考えている。なお、具体的な活用の方法は以下のようなイメージである。



「アセスメントシート」の活用イメージ

単元の指導にあたっては、学習指導要領に定められている指導事項の他に、その指導事項や単元の特性にしたがった「行動指標(ループリック)」を用意する。それはアセスメントシートをベースとしたものであり、非認知能力(≡主体的に学習に取り組む態度)<sup>\*9</sup>を育成するための指導にあたる部分である。

そして、前述の通り単元の途中や最後にアセスメントシートを記述することで生徒が自らの非認知能力につ

いて省察し、またその記述内容を用いて教師が逐次生徒にフィードバックすることで、お互いが現状を共有できるようにする。そうした営みを繰り返すことで、「質の高い学び」を支える非認知能力を確実に育成できるものと考えている。

## 5. 実践と考察

単元名「説得力のある批評文を書く」(第3学年)

### 5.1. 単元の構想

本研究の対象である第3学年の生徒に対し、書くことに関する以下のような調査を行った。

質問項目	できていない どちらかというて できていないの回答
根拠をはっきりさせながら相手に考えが伝わるように書くことができている。	12.1%
伝えたい内容の中心をはっきり伝わるように書くことができている。	16.7%
どのような考えをもつ読み手からも一定の理解が得られるよう、論理展開を考えたり構成を工夫したりして説得力のあるものを書くことができている。	21.0%

以上の結果から、論理の展開や文章構成を考えながら説得力のある文章を書くことを苦手と認識している生徒が多いことがわかった。

本単元では、「説得力のある批評文を書く」という活動を中核に据えた。今回、批評文を書くために重要なポイントを2つに絞った。

A.対象をじっくり観察・比較・分析し、客観的に評価すること

B.論理の展開を考えながら構成を工夫したり文章の表現を工夫したりすること

この2つのポイントを基に書くことで、より説得力のある批評文に仕上がることを実感させることが重要である。なお、本単元で講じた手立ては主に以下の2点である。

#### ①プロジェクト学習におけるICT機器の活用

本単元では、本稿「4. 1.」で述べたように、批評する対象物について他者と協働して分析する活動、批評文の執筆、作品を共有し互いに推敲したり評価したりする活動など、多くのフェーズでICTを活用することにした。こうしてICTを活用することで、他者と即時的に情報を共有して学びを深めたり、その学びを自らに還元したり、学習資源として蓄積ながら活動を充実させたりすることができる考えたためである。

#### ②省察を促す非認知能力「自己評価シート」(アセスメントシート)の活用

本校の研究である非認知能力について、生徒が「自分を高める力」の伸びを実感したり教師が生徒の変化を見取り助言したりできるように、先に示した「本研究で用いるアセスメントシート」の質問項目をベースに以下のよ

うな5段階評価の自己評価シートを作成した。

自分を高める	努力を課題解決につなげた	目標達成を目指す姿勢	よりよいものを目指す姿勢	特記事項
1時				
2時				
3時				
4時				
5時				
6時				
7時間目				
変化を見て振り返り				
永井より				

#### 非認知能力アセスメントシート

このシートに数値を入力することで、非認知的な領域が折れ線グラフになって現れ、生徒が自らの非認知能力をリアルタイムに自己分析できるようになっている。そのグラフを見ることで次時以降への自己調整を行うと共に、単元終了時に自らの非認知能力を振り返り、さらに教師からフィードバックをすることで、次の単元に主体的に向かうためのフォローアップができ、質の高い学びにつながるのではないかと考えた。

なお、本単元のおおまかな流れは以下の通りである。

時	学習内容	評価規準
1	○高校の学校案内の表紙を用いて対象物を批評するのに必要な要素ついて理解する。 ○単元の課題を設定する。 『観光ポスターを批評し説得力のある文章を書こう』	知 態
2	○パッドモデルを改善しながら、説得力の上がる文章にするための方法を考えるなど批評文の書き方を学習する。	思 態
3	○形式にあてはめながら批評文を書く練習をする。	思 態
4 (本時)	○各地の観光ポスターを観点に沿って比較・観察し、得られた特徴を分析する。	思 態
5・6	○批評文を書く。	思 態
7	○批評文を相互評価し、学習を振り返る。	知 態

### 5.2. 授業の実際

本単元は批評文の執筆を2サイクル行った。第1時～第3時は、高校の学校案内の表紙を用いて、批評するための手立てである「観察・比較・分析」を学び、形式に当てはめて批評文を書く練習をする。

第4時から、4つの都道府県の観光ポスターから優れていると考えるものを選び、批評文を書いていく言語活動である。本時は2サイクル目の最初の活動であり、以下の問題提示からスタートした。

#### 【問題】

これらの観光ポスターの中でもっとも優れたものは？

生徒は直観を働かせ1枚を選んだが、そこにはどのよ



うな特徴があるのか、またさらにじっくりと観察することでどのような分析ができそうかを考えさせるために、本時の課題を提示した。

**【課題】**  
観光ポスターを観察、比較、分析して批評しよう。

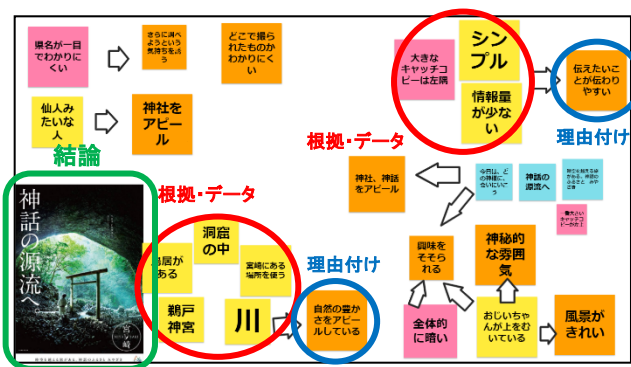
課題の解決に向けては、前述したプロジェクトの中でICTを使いながら活動を行った。直観で選んだポスターごとにグループを作り、Jamboard上で自分たちの選んだポスターの分析を行った。

その後、各ポスターの分析を全体で発表し合い共有した。さまざまな分析が出たところで、改めて観光ポスターがつくられている目的を考えさせた。観光ポスターには「地域を活性化させるため」「街の魅力を伝え観光客を呼び込むため」などの目的がある。この発問をすることで、生徒は出てきた様々な分析から、批評文を書くためにポスターの目的に沿っている分析がどれか取捨選択しなければならないことに気付く。

最後に、どの観光ポスターが最も優れているかを、ポスターの目的も含めて総合的に考えて答えを出し、さらに分析を進めながら批評文を書いていくという見通しをもたせた。授業の終わりにはアセスメントシートを用いて自己評価し、次時へとつなげた。

### 5.3 結果と考察

以下は本時で生徒がまとめたポスターの分析である。



生徒は、2年時にトウルミンの三角ロジックを学習している。ここでは、どのポスターがよいか論理的に判断を下すために、観察したことで得られた特徴、そこから考えられる分析を、それぞれ三角ロジックにおける「データ」、「理由付け」とし、どのポスターがよいかの最終判断を「結論」として、論理性のある批評文につながるようなJamboardづくりを行った。

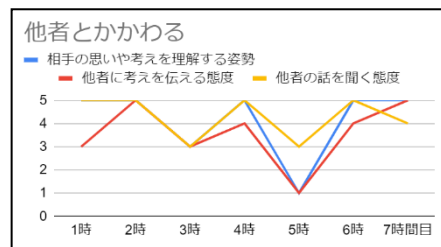
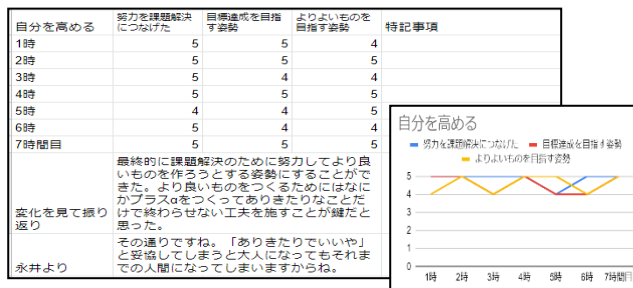
生徒は他者との交流を通してさまざまな特徴を見いだしたり分析をしたりし、自らの批評文につなげていた。この分析を基にもう一度問題の答えを考えさせた。

あなたは、観察・比較・分析の結果、どのポスターを最も優れていると評価しますか？

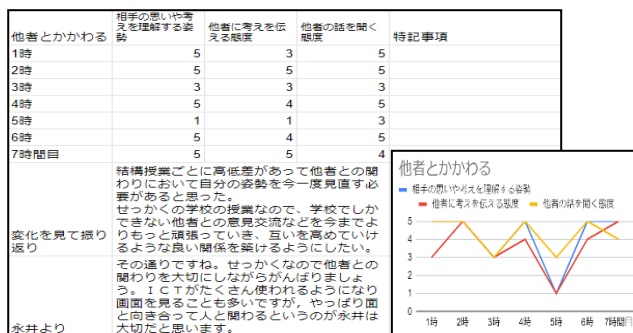
宮崎県	(理由) 他の3枚のポスターと比べると、情報量が少なく、見やすい。ポスターはパッと見てすぐに魅力などがわかる方がいいと思うから、宮崎県のポスターが優れていると思う。
-----	---

上の生徒は、観察した内容を比較しながら分析し、観光ポスターの目的やよいポスターの前提を踏まえて論理的に判断できている。生徒は、この記述を基に、さらに自分で分析を重ねたり他のグループの分析を参考にしたりしながら次時の批評文を書く活動につなげていた。

また、以下は単元を終えた生徒のアセスメントシートである。



この生徒は本単元の中で、「自分を高める」という点に関して「よりよいものを目指すにはありきたりで終わるのではなくプラスαをつくっていくということが大切だ」と述べている。またグラフからも自己を高めようと意識しながら学習に臨んだといえる。



この生徒は「他者と関わる」という点に関して、自分の姿勢を見直している。第5時では、批評文の執筆の際に、困ったことや進捗状況を交流しながら進めることを指示したが、執筆に集中するあまり他者との関わりが少なくなってしまった。そのため「自他を高めるために他者との交流を大切にすること」を今後の課題にしている。本単元を通して国語の能力だけでなく、非認知能力の「自分を高める」部分を見つめ直し人間として成長しようとする

姿勢が見られた。

このように、アセスメントシートは非認知能力を省察しながら単元を進めることができるものであるといえる。

しかし一方で課題があることも分かった。

自分を高める	努力を課題解決につなげた	目標達成を目指す姿勢	よりよいものを目指す姿勢	特記事項
1時		5	5	4
2時		5	4	5
3時		5	4	5
4時		5	5	4
5時		4	4	5
6時		5	5	5
7時間目		5	5	5
変化を見て振り返り	後半は5が続いているので自分の批評文を高めていくことができていたのだと思う。			

上の生徒の振り返りの記述はグラフから表面的に判断したものであり、自分をメタ認知しながら書くことができていない。また、以下は同じ生徒の次の単元のアセスメントシートである。

自分を高める	努力を知識の向上や課題解決につなげた	よりよいものを目指す姿勢	特記事項
1 基礎・エクスパート学習	5	5	
2 エクスパート・レクチャー	5	5	
3 レクチャー・振り返り	4	4	
4 15歳の相聞歌	5	4	
変化を見て振り返り	最後に自分が本当になつとくのかいく作品が作れたかどうか少し残りと感じた		

この記述を見ると前の単元とのつながりが見られなかった。単元間での非認知能力を高めるための指導(見通しや振り返り)が不十分であったと考えられる。また非認知能力の育成について年間を通して見通しをもちながら指導していく必要があると感じた。

## 6. 今次研究の成果と課題

本校国語科では、今次研究の主題を「自ら課題を設定し、知を築く生徒の育成」と掲げて研究をスタートさせた。

本稿では、これまで最終次研究について述べてきたが、以下に今次研究全体の成果と課題、および今後の新たな研究に向けての展望を述べる。

### 6. 1. 研究の成果

本校国語科の1年次研究では、副題を「自己調整的な知の構築へつなげる方略の研究」とし、自己をメタ認知し、モニタリングしながら学びを進めることのできる生徒の育成を目指した。

1年次では特に知識構築のプロセスに注目し、どのような方略を打てば「知識発見から知識構築のプロセスへ」と移行することができるのかということを試行錯誤した。このプロセスを遂行する際、最も効果的であると考えたのが「プロジェクト学習」の理論であり、手法である。鈴木敏恵(2012)のプロジェクト学習の各フェーズを国語科なりに整理し直し、またそのフェーズごとに問いを立てるこ

とで、プロジェクト(単元)が十全に進行し、さらに生徒が自己調整的に学びを広げ深めていけると考えた。

その結果、最も大きな成果として実感するのは、学びの必要感や充実感を創出できたことである。そうした感覚を抱きつつ進む学びは、オーセンティックなものとなり、今後の生徒の学びや、果ては言語生活を含めた人生そのものにまでつながるものと考えられる。

2年次研究では、副題を「他者と関わりながら、自ら学びを進め深める方略の研究」とし、自己の学習を各段階において適切に把握し、かつその中で適宜他者と関わりながら学びを進め、深めることのできる生徒の育成を目指した。

1年次における成果の上に立ち、2年次では、プロジェクト型の学習プロセスにおいて、特に各フェーズでの「問い」を精選することを心がけた。その結果、単位時間どうしのつながりがより一層スムーズになり、同時に生徒の学びにもつながりがもたらされ、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の確実な高まりを促すことができた。

また、プロジェクトの各フェーズに対話場面を設けることで、他者との差異の中で自らの学びを見つめ直し、改善へとつなげることができた。このことは、他者との対話が、新たな智慧や価値を生んだということに他ならない。

おそらく社会においても、あるプロジェクトを遂行し成功させるためには、他者との協働が欠かせないファクターとなる。だとすれば、本実践における単元の設計は、ひいては生徒の社会生活にまで転用することができるものであるということができると考える。

最終年次では、副題を「言葉を介して他者と関わり、自ら学びを進め振り返る方略の研究」として、これまでの2年の研究をアップデートさせつつ、パッケージとしてまとめる意味合いをもたせ実践を行った。他者と関わる際の方策として ICT をより効果的に用いたり、自らの学びを進め振り返る際の方策として「アセスメントシート」の活用を試みたりした。

他者と関わる際の ICT の活用については、前述の通り即時性(素早く、広く)が増すことで、より立体性をもたせた学習活動を行うことができた。

また「アセスメントシート」については、通常の授業では見えない生徒の非認知領域に、ある程度踏み込めた実感がある。本校研究の総論でも述べている通り、非認知能力は「主体的に学習に取り組む態度」を含み込んでいると想定されるため、2年次研究で高めることのできた「知識・技能」や「思考・判断・表現」との連関で非認知能力を捉えることで、資質・能力のバランスがとれた学びを促すことができ、またそれに伴う見取りも行えたのではないかと考える。

## 6. 2. 今次研究の課題と今後の展望

以上の成果があった今次研究であるが、その一方で課題もいくつか見られる。例えば、以下である。

### ①ICT の使用による学びの孤立化と協働

前述のように、今次研究では、これまで研究を進めてきたプロジェクト学習の中にICTを組み込んでいくことで、より効果的・効率的に学びを促すことができたと考えられる。しかしながら一方で、ICT を活用することで、生徒が向き合う対象がICT 端末になってしまい、生徒同士が音声言語を介してコミュニケーションをとる場面が減ったように実感している。これは、ICT の浸透による光と影であるとも捉えることができ、今後の根深い問題になることも予想される。

このことについて学習指導要領では、「個に応じた指導」を一層重視し、指導方法や指導体制の工夫改善により、「個に応じた指導」の充実を図るとともに、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整えるとともに、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ることが必要であると述べられている。

また、中教審答申における「令和の日本型学校教育」の構想(2021)においては、「個別最適な学び」を「指導の個別化」と「学習の個性化」の2つの側面に整理しており、そのうち「学習の個性化」については、「一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する」とある。

以上のことから、今後の本校における国語の研究においては、「学習の個性化」として「主体的に学習に取り組む態度」を高めるべく質の高い学びを保証するとともに、より協働性の高い ICT の利活用について考え、実践していく必要があると考える。

### ②学習者自身が学びのゴールを描くこと

本校国語科の今次研究においては、「プロジェクト型の単元構成」をとることで、生徒が単元の学びの全体像を捉えることができるよう工夫してきたつもりである。

一方、本校研究における生徒の実態を調査したところ、以下のような結果(課題)も見られた。

【問:今の自分に欠けている力は?】

項目	割合
自ら学習のゴールを設定し、計画的にコツコツ取り組む力	57.6
読解力	44.9
自らの学習状況を正しく把握するための情報処理能力	37.1

※複数回答可, 設問数12個

「学習の個性化」については前述の通りであるが、「個別最適な学び」の一つの側面である「学習の個性化」を促していくためには、生徒一人一人が自らの学習における問題を発見し、そこから課題を見だし、自らが学びのゴールを設定することができる、そのような一連の流れを指導者が促すことが、今のところ一つの理想であると考えている。

そうした学びを効果的に成立させるために①で述べた ICT の効果的な活用があったり、仲間との協働的な学びがあったりするのではなかろうか。

いずれにしても、ここに掲げた①と②の展望に即して、新しい研究に歩を進めたいと考える。

## 注釈

- \*1 文部科学省.「学習指導要領解説 総則編(2019年7月)」.p79
- \*2 石井英真(2017)「アクティブ・ラーニングを超える授業」.日本標準.p16
- \*3 プロジェクト学習の理論と手法については、鈴木敏恵(2012)『課題解決力と論理的思考力が身に付くプロジェクト学習の基本と手法』に基づいている。本校における実践の詳細については、北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(69)」の「国語編」に述べている。
- \*4 グランドデザインの詳細については、北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(70)」の総論に述べている。
- \*5 この詳細については、北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(69)」の国語編に述べている。
- \*6 「問い」については、下図の他、北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(69)」の国語編にもその詳細を述べている。
- \*7 「主体的に学習に取り組む態度」と「非認知能力」との関連については、本研究紀要の「総論」に詳しく述べている。
- \*8 中山芳一(2020)「自分と相手の非認知能力を伸ばすコツ」p30-36
- \*9 「非認知能力」≡「主体的に学習に取り組む態度」の詳細については、\*7にも述べた通り、本研究紀要の「総論」に詳しく述べている。

## 参考文献・論文

- (1)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(67)」
- (2)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(68)」
- (3)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(69)」
- (4)中央教育審議会.『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方

- 策等について(答申)』(平成28年12月)」
- (5)文部科学省.「学習指導要領解説 国語編(平成29年7月)」
  - (6)佐藤学.「質の高い学びを創る 授業改革への挑戦」. 東洋館出版社.2009
  - (7)田中耕治.「パフォーマンス評価 思考力・判断力・表現力を育む授業づくり」.2011
  - (8)鈴木敏恵.「課題解決力と論理的思考力が身に付くプロジェクト学習の基本と手法」.教育出版. 2012
  - (9)溝上慎一「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」.東信堂.2014
  - (10)「読み」の授業研究会編.「国語科の『言語活動』を徹底追究する 学び合い, 学習集団, アクティブ・ラーニングとしての言語活動」.学文社.2015
  - (11)松下佳代.「ディープ・アクティブラーニング」.勁草書房.2015
  - (12)西岡加名恵/石井英真/田中耕治.「新しい教育評価入門 人を育てる評価のために」.有斐閣コンパクト.2015
  - (13)石井英真.「アクティブ・ラーニングを超える授業」. 日本標準. 2017
  - (14)奈須正裕.「『資質・能力』と学びのメカニズム」.東洋館出版社.2017
  - (15)教育調査研究所編.「教育展望」.2018
  - (16)北村友人, 佐藤真久, 佐藤学.「SDGs時代の教育 すべての人に質の高い学びの機会を」.学文社. 2019
  - (17)文部科学省教育課程政策課編.「中等教育資料(令和元年10月号)」.学事出版. 2019
  - (18)中山芳一.「自分と相手の非認知能力を伸ばすコツ」.東京書籍.2020
  - (19)時事通信社編.「内外教育」.2021.p15
  - (20)小塩真司.「非認知能力～概念・測定と教育の可能性」.北大路書房.2021
  - (21)中教審答申.「令和の日本型学校教育」.令和3年1月26日